661

特252
522

日本文化

第十二册

日本精神と自然科學

文學博士
美正平紀

始

特252
522

帝國圖書館藏

日本文化 第十二冊

日本精神と自然科學

文學博士 紀平正美

日本文化協會

昭和十三年 帝國圖書館

本書は、昭和十一年十一月文部省主催の日本文化教官研究講習會（自然科學第一回講習）に於いて、文學博士紀平正美氏が「日本精神と自然科學」と題して行はれたる講演の速記を博士の訂正加筆を經て上梓せるものにして、文部省藏版「日本文化叢書」の一冊である。

昭和十二年十二月

日本文化協會

日本精神と自然科學

名譽ある諸君の前で卑見を述べさして戴くことは非常に光榮と存じます。

一體流行といふものは輕薄なる思想の現れでありますし、同時に輕薄性を增長するものであります。

すが、さういふ意味に於いて今日日本精神といふことの流行が又此の俗惡性をもつて居る半面があらうと思ひます。本來日本精神なるものはさう簡單なものではなく、三千年來我が國民が己が建國の使命として養ひ來つたものであつて、本來の日本人は皆有つて居る禪に云ふ「平常是道」と云ふ所の精神でありましてこれを分析的に說明するとなれば、簡單に一朝一夕に盡すことも出來ないものであります。それで其の語がはやるからといつて、若干それに就いての講義をして、それで簡單に日本精神の把握が出來るといふものでもないのであります。禪宗の或る坊さんが、學者といふやつは面倒なやつで、自分の父と言へばいいものを、自分の嫂の舅と言はなければ承知しないと言つて居りましたが、實に面白い言ひ草であります。流行的の日本精神、自由主義的な、デモクラチックの、もう一つ根本的に言ひますれば、個人主義的の立場で、日本といふものを見まする時に、それは嫂の舅となり、實は顚倒して參りまして、畢竟日本精神をば混亂せしめるだけの話であり、少

しも本來有つて居る我々獨自の力をば發揮せしむる所以ではないのであります。そこに今申しました俗惡なる流行性がある、昔の希臘のソフィスト的なものがあるのであります。今日多くの日本精神といふ標題に依つて言はれて居るところのものを諸君が若し御讀みになりまする時には、この點を餘程御注意下さらなければならぬと思ふのであります。

さうして、この流行につれまして一般の教育界に——教育界といひますか、寧ろ普通教育程度に於いてでありますが、小學校とか中學校程度の人々で自然科學乃至それに關係した學課を受持つ人々は、日本精神といふ流行に押されてしまつたといふやうな氣持に囚はれて、自分達はどうしていかといふやうなことに迷つて居る者が澤山あります。それと、自然科學者の中に、これは寧ろ普通教育以上に從事して居る人々でありますが、自分達は一向そんなことに無頓着であるといふ考へにお立ちになる人があります。更にもう一つ上へ行きましては、日本精神と言つた所で、西洋から來た自然科學の御蔭に依つて、今日の日本はこれだけに發達して居るのに、國體だの又日本精神といふことの高調によつて、此の成果を無視するといふことになる、それは甚だ不都合であると御心配になり、日本精神の流行といふことも一時的のものであると考へて居らるる人々もあるのであります。

それで日本精神といふやうなものが果してさういふ風な偏狹なものであるかどうかといふことが實は根本の問題になる譯であります。後に漸次明らかに致しますが、如何にも日本精神と個人主義的のあらゆるものとが、總ての點に於いて倒逆の關係をもちますが、自然科學といふやうなことは決して背馳するものではありませぬ、如何にも甲と乙とが、其の何れをとるべきかといふ樣な關係に立つが如く考へて居る人も、今日澤山あるのであります。勿論それには又理由もあります。即ちこれも亦俗惡なる分ち方でありますが、往々にして斯く言ふ人もあります。東洋には精神文明があり、西洋のは物質文明だと。さういふ人々には、私は早くから申して居るのでありますが、西洋に精神文明がなくしてあれだけのことが出來るか、日本に物質的の要求がなくしてこれだけよく生きて居られるかと。只双方の考へ方が違ふのでありまして、決してそれは精神文明、物質文明といふやうな區別で分けるべきものではないのであります。若し精神文明、物質文明といふことで區別するならば、如何にも此を立てれば彼は立たぬ、彼を立てれば此は立たぬといふやうな關係になりますが、決してさういふやうな意味のものではないのであります。

少し諸君に申上げるにしましては子供だましのやうな議論から始めることになりますが、御許しが願ひたい。抽象的にものを見て來る、それは總て「我」を本にした方法、政策といふ立場から發達して來るものでありますがさういふ見方卽ち知識的に正當には悟性の働きにて、物を考へて行くといふ方法と、日本のやうに行の立場で考へて行くのとの相違に就いてであります。それを簡單に說明さして戴くことから始めます。知的には必ず對象を抽象して考へます。それでこの抽象的に構成せられた、抽象的概念に何等かの實體性、若しくは眞理性があると考へるところに、大きな間違ひ

があるのであります。先日來ここで三日間の會議がありました時にも、それが現はれました。今それをばその一例となしますると、宗教と教育とをどうするかといふ問題に就いて惱んで居る樣な樣子があります。一體宗教とは何ぞや、これは日本になかつた言葉であります。宗教といふ概念は日本に無かつた概念で、個人主義の所産であり、今日教育學者の言ふ樣な教育といふ概念も同樣であります。此等概念が輸入せられて、其等に何等かの實體性がある樣に考へて、宗教學者や教育學者が、其の關係如何といふことを論じ合うた所で、それは百代河清の期を待つ樣なものであると言はねばなりませぬ。殊に宗教といふ概念に就いてでありますが、日本には何故それがなかつたか、威儀卽佛法、佛法卽宗旨といふ語で既に明らかである樣に、所謂宗教の本質は教への根本的なものであります。教へであります。行であります。教へ方をどうするかといふことに色々の方便が立つ譯であります。それが宗派であります。結局日本人をどう教へるかが宗教であり、宗派の差別とは、卽ち其の作法の相違に過ぎませぬ。作法といへば、例へば客が來た時に茶を先に出すか菓子を先に出すかぐらゐの相違であります。さう考へて來れば、日本の教育、また日本人を教育するのに如何なる方針をもつてするかといふことに宗教があり、それには何も教育との間に爭ひがある筈ではありませぬ。然るに宗教といふものは何かを、一般的に抽象しまして、そこに神樣を立てるとか神樣の種類をどうするかといふやうなことが宗教の本質であるかの如く考へるものだから、日本の神樣は佛教の佛やキリスト教の神とどう違ふのだ、それの善惡、是非を決定しなくてはならぬといふ樣な空なる葛藤を致して居るのであります。餘計な抽象概念の迷ひであります。正當にそれが行の立場に於ける意義を考へれば、何でもなく解決し得らるる問題であります。それを從來は、今まで日本になかつた概念、西洋人なれば何かに役に立つたであらうものを引つ張り込んで來まして、それに何等かの意味があるかの如く考へて、非常に苦しんで參つたのであります。卽ち學者の閑葛藤が如何なる方面にも多かつたのであります。

更に他の一例を擧げる。日本にては「社會」といふものは全くない世間といふ語は活きて居る。西洋に於いて何故「社會」といふ概念又それに應ずる實體が起つたかといふことを知らないで、日本の「世間」に當嵌めて、當嵌まらない所をば西洋的のものを押しこめて居ります。某倫理學者は國家は「社會的ならざるべからず」と公言しました。「人は動物的ならざるべからず」といふたら可笑しいではありませんか。考へ來ればさういふものが澤山あります。皆抽象の迷ひであります。

さて便利のために英語で書かせて貰ひます——人が知的に發達する場合を抽象して考へて見て、未知のものに出逢うた時に、第一の問題は What? であります。例へばこのチョークを見て之を知らない小兒は「それ何に?」と第一に訊くにきまつて居ります。「それはチョークだ。」「チョークつて何に?」そこで抽象的に考へて行く人は、其の問に對して定義を與へます。そしてこれで抽象は止まりであります。それ以上出やうがないのであります。ところが純な求知の子供から尋ねられたらどうするか。「チョークとはボールドに字を書くものなり」と例へば定義した時に「ボールド

とは何に？」「字を書くつて何に？」と、どこまでも追究止まないのであります。それで What？の問に完全に答へるためにはボールドへ字を書いて見せなければなりませぬ。この通りだ、かうするものだとやつて見せなければなりませぬ。さうすれば子供は、ああさうか、と言つてそこで滿足します。然し直ぐ次に出て來ますのは Why？であります。なぜそんなことをするのか、なぜ字を書くのかといふことになります。今字を書くぐらゐのことなれば問題は何でもありますまいが、若しあなた方が煙草を喫つて居られる時に、お父さんなぜ煙草を喫ふの、こんな煙いものをなぜ喫ふのと言つたらどうしたらいいか、酒を飲んで居る親父に向つて、こんなものお父さんなぜ飲むのと言はれたらどう說明しますか。ここには所謂說明の仕方は何もないのであります。何故にの問題は結局オーソリティー（Authority）を要するのであります。既にお父さんなぜこんなことをするのだといふことを訊かすことは、卽ち父の鼎の輕重を問はれたことであります。既に鼎の輕重を問うたものに、理論で說明しようとした所で、絕對に不可能であります。そこには親の權威が必要であります。其の權威には又いろいろ抽象的に見れば種類がありませう、或はその人の持つ人柄の上から出て來る權威、或は社會的の一般の一致といふやうなものに依つて出て來る權威――上にも斷りました通り、斯く分けることが抽象的であります。權威は抽象の知からは問はるべきものであつて、しかも行的には問はしてならないものであります。然し何事によらず權威がつきますと、先づ大抵の人はそれを私用する、卽ち理窟を言ひましてこの權威を胡魔化すのです。此の胡魔化しをスコラ哲學と言ひます。眞の權威なら問はれないで、卽ち權威は內存的のものであります。それで例へば子供はチョークで上手に書でも畫でも書いて見せれば、そこで滿足する、卽ち權威を感じて、學ぶ卽ち模倣の態度に直ぐ從順に出まして、How？どうしたらさう出來るか、自分がやつて見て出來なければ敎を請ふのであります。更に言ひ換へれば權威を承認すれば、あとは「我」をとつてしまつて、其の方法を學ぶ、これが所謂方法論であります。方法は How？の態度から出る、卽ち主として今日の科學といふのはこの方法論の問題なのであります。權威の問題は特に宗敎に關する所のもの、What の問題は主として藝術が與る方面であります。

これは極く抽象的に御話したのでありますが、これと聯關して生ずる認識論上の面倒なことは、今は略せるだけ略したいと思ふのでありますが、御承知でもありませう、近世の自然科學は特に How の問題をば主題として取つて來た方法論といふものが眞先に立つたのであります。デカルト、ライプニッツ、スピノーザ、或はベーコン乃至ロックの思想を支配したものは悉くこの方法論であります。その方法論が先述の順序上それが如何なる意義のものであつたかを捨象して、今日では科學方法論なんかと言つて、それのみを又抽象的科學的の對象として、又方法の分類までなすことによつて、それを科學的だと言つて居るところに又抽象の誤りがあります。學問が如何にも古い權威をそのまま、云はば鼎の輕重を問はれながら進んで來たに就いて、新時代の文藝復興といふ時代精神を權威としての方法論がその儘活きて來たのであります。ところが近世の個人主義的の立場で、

自由、平等、四海同胞といふ三つの原理により、又科學的の分析に依つて Why の歸着點である權威をば又分析することによつて、それをすつかり壞してしまつた時に、あとに殘つた方法論は全く機械化されて、科學者の者をも捨てることになりました。例へば科學方法論が徹底しますと、科學の法則は結局「何故」を說明するものに非ず、烏の羽はなぜ黑いか、鷺の羽はなぜ白いかといふことは自然科學の說明するものではない、ただ「如何」にといふことに徹底して行くべきが科學である、それだから、今まで科學の法則は說明であると思うて居つたが、それは間違ひであつた、只思惟經濟的に事物關係を記述するに過ぎないものであるといふ議論が出て參りました。それは寧ろ當然のことであります。英國のポアイスチングなどは宇宙或は自然の法則といつたところが、例へば運動の法則といつたところが、何が故にさう運動するかといふことを說明して居るのではない、ただかうした場合にかう運動するといふことを出來るだけ簡單に記述したものに過ぎないと明言するに到りました。斯くては權威を論ずる、否な權威を承認することすらが、科學のするところに非ずとなされ、自由平等といふことを更に徹底せしめましたが、其處には又四海同胞といふことすらが失はれました。此が現代の狀態であります。それで若し科學がそれに止まつて居ればそれでもよいのでありますが、しかし人間の有つて居る「人間性」といふものは、單に思惟經濟的に物を記述することでは止められませぬ。そこで科學者が己の研究範圍を逸脫して、己が得たるものを以て「人間性」そのものを律せんとします。例へば數及數の關係は思惟の所產である、然るにそれを以て人間性を定めんとするが如きはそれであります。これは自然科學のみならず、あらゆる方面がさうであります。自分のやつて居ることは一方面だけである、故にそれに止まつて居れば問題はありません。それ以上に出て來て、それをば說明的のものに持つて來る、卽ちそれは實は自己をば權威者たらしめんとする我執であつて、其處に論理的の誤謬、間違ひが起きます。學者はもつと謙讓でなくてはなりませぬ。

更に例へばダーウィン流の進化論であります。これが從來西洋人でもでありますが、特に日本の若き學生をどれくらゐ迷はしたか分からないのであります。「君のお父さんは何だつたかい」とかう問うて見せます。「お父さんはやはり人間さ。」「そのお父さんは」、「そのお父さんは」と問ふた時に、少くも日本人であるならば猿だの或は猿と人間との中間のもの（その何たるかを知らず）更に下等動物だと言ふものはないと思ひます。個人主義的に長く訓練せられた人間にはそんなことはどうあつても問題にはならないからよろしい。例へばアメリカ人には己が祖先が英人であるか、スコットランド人であるか、獨逸人乃至伊太利人であるかは最早問題でないであらうと思ひます。然るに我等日本人では大問題であります。我等の國土一切が伊弉諾伊弉冊兩尊の產み給ふところのものであり、我々の祖先は神であるからであります。しかしさう云ふ神は又どう云ふ神であるかは後で申しますが、ともかくそこで、自然科學的のものと所謂精神的のものとが、如何にも喰違ひを生するやうに考へられるのであります。そして科學的のものにあらざれば眞でないと考へる、然るに

其の科學的のものとは實は個人主義的悟性の所産であつて、我等のやうに理性的のものではない、よく考へれば何も喰違つて居るのであります。御承知の通りダーウィンの進化論と云ふのは、リンネウスの植物研究から始まりました、生物一切に亙つての分類法に本づいたものであります。畢竟分類法には色々あるが、最も自然的な形に分類するといふ、その思考の方向に出來上つたものが進化論たるに過ぎないのであります。つまり人ならば人そのものを取扱ふのではなく、人といふ概念、猿といふ概念、犬、猫、アミーバといふ概念、それ等を並存的にならべて、その間に所謂自然的の連絡をつけて來たのであります。個別原理と同時に連續の原理をそこへ持つて來まして、云はば横に一本筋に概念が並べられたといふだけの問題であります。或る箇處と或る箇處との間が、まだ何か連絡が付かないやうに考へられると、それへ掘り出された古生物を持て來てその間に入れるとか又は比較解剖をやつて見て類似點を見出すとかいふやうなのが、進化論者の現にやつて居る仕事であります。そして簡單なるものから複雜なるものへ横に分類を正當にする、それだけならば我等は何等の異存はないのであります。處が其の横の一貫をばその儘縱にして來まして、時間的の統一一貫にする、卽ち古き時代はアミーバであつたが長き時間の間に人間にまで進化して來たのだといふ風にするところに、大きな誤りをして居るのであります。横空間的な統一、縱時間的の統一といふ統一の仕方が、そこに非常に違つた原理のあるのを無視して居るのであります。私は或る所で、「進化論者見て來たやうな嘘をつき」と言つたら非常に怒られましたが、科學の立場では、觀察實驗するといふこと、それが科學者の尊い行であります。そして、それの結果以外には一歩も出ることが許されませぬ、それが科學的精神であります。推察を許しませぬ。比論推論は勿論許さるべきでありますが、横と縱とは相違があります。進化論者が若し猿が人間になりつつあるのを觀察實驗したならば致し方がありませぬが、鰻が山の芋になりつつあるところのものを誰が觀察實驗したか、そんなことを誰も實驗したものはありませぬ、皆な推論に過ぎぬのであります。古い時代にはかうであつて、これがかう進化して來たといふが如きは皆な推論に過ぎないのであります。若しさういふ推論が許されるならば、他に更に重大なる關係を忘れてはならぬ、それは人間には歴史があるといふことであります。つまり前述の如く横空間的の仕方と、縱時間的の上に統一する推論の仕方とには、非常に大いなる相違があるといふことを考へての上で、やつて貰はなければなりませぬ。卽ちそこでドイツのカントからヘーゲルに至つて始めて明確に區別を致しましたヒストリー（Historie）とゲシヒテ（Geschichte）との間に大きな區劃を付けて貰はなければなりませぬ。さういふことに無頓着な、例へばイギリスのエッチ・ジー・ウェルスなどが「人間の歴史」と題して書いたものは類人猿類似の人間から始めて居りますが、それは博物學（Natural history）に過ぎませぬ。昔アリストテレースがやりましたやうに、人間のもつ一種の好奇心にかられて色々なものを一つに寄せ集めるだけの話で、それ以上一歩も出たものではありませぬ。歴史の如き嚴肅性を有つたものではないのであります。

かやうに、抽象的知的組織からしますると分類的のもの、横の統一組織しか出來ませぬ。それに對しての行的の組織は、前に申しましたやうにその根本が權威であります。權威がなくば行ぜられませぬ。早い話しが人々が集まつて會議をする、其の議決は非常に立派でも、決して實行力はありませぬ。それが行的のものと時々間違へられるのであります。附け加へさして戴きます。曾つてこれは私のまだ自分の學問が最高のものであると思うて居た若い時の事でありましたが、心理學を研究して居る人に、君は心理學を研究するといふが、一體君等の研究して居る「心」とは何を言ふのか、心のことか生理的のことか、果して何を研究して居るのだと訊きましたら、僕等そんなことは問題ではない、只やつて居るのであると。その時に私はをかしく思ひました。何を研究して居るのかが分らぬで研究して居るといふのは一向につまらぬことではないかと。その後になつて私は考へて見た時に、そこに行的には非常に大きな意味があるのでありまして、若しこの中に眞に觀察實驗の科學的の行に從事して居られる御方があるならば、卽ち他人の研究の結果を寄せ集めて、それで「組織」だなどと意張らないで、眞に觀察實驗に從事して居れる方であるならば、決して自分の研究して居るものが何だやら、そんなことに頓着ある筈がないのであります。勿論其處に一の缺陷が起る、卽ちそれは餘りに傳統に執へられて自由なるを得ずといふことであります。一般に知的要求は此の缺陷から生ずるのであります。然し知に偏して行を捨てるといふ偏知に對して、私は玆に行の態を云はんと欲するのであると、御承知願ひ度いのであります。眞實の行ならば其處に自ら自己批判の眼が生ずるものと考へるのであります。科學者が事實やつて居られることは觀察實驗といふ科學の行であります。そこに科學者の眞の眞面目さがあります。そしてそこに日本精神と科學とを聯關せしむる大事な點があります。行的には之を道的といふか、宗教的と云ふか、或は意識的と云ふか、寧ろ無意識的と云ふか、とにかく一つの權威に隨順し歸依し奉仕するときもう理窟なしにそのことに從事して居るところに出て來る結果こそ、自然科學に限らず、一切の學問の本當の結果なのであります。

丁度その頃は私は論理學の組織に一生懸命になつて居つたものでありますから「何か」の問に對するものとして定義等種々の方式――これが當時の研究では七八種出來得たのであります――をどうしようかなど云はばつまらぬことに苦しんで居つた時であります。西洋系統にては既にデカルトが物と心との二つを定義的に確定しました。然し斯く定義的に確定致しますると、それ以來今日迄心理學はその物と心とをばどう關係せしむるかに迷つて居て未だ解決は出來ませぬ、つまり抽象的概念に迷つて居ります。しかし例へばここに實驗心理學者が居るとする、其の人は最早其んなことは問題でなく、當面出て來る問題をば只管研究して居るでありませう。然るに一時ドイツの哲學者等、――特に新カント學派に私は不平を有つ――卽事而眞、當相是道といふことを忘れて、抽象的な方法論に囚はれ自らは何もせずに居て、論理學で諸科學の基礎付けをするのだなどと高慢な態度が出て參りました。それは「當爲」こそ哲學の對象なりと抽象したから起つたものであり、一時は

私もそれに迷ふたのであります。論理學は我々の精神の働きを論ずるものでありますから、精神の働きを論ずる以上、色々な學問はどういふところに出るかといふことの基礎を明白にするのが論理學といふ學問だと考へたのであります。此れは一應は正當な考へ方であります。又其の通りであるべきでありますが、しかし待て待て、ここに大きな誤りがあります。科學者が眞に研究して居る、それが眞の行者であります。抽象的な理窟を言うて居る論理學者は塵の端ほども、それに對する批評の權利はない、若しさうするならば、それは越權の沙汰であります。論理學者は論理といふところに入つて觀察實驗して居る、卽ち其處にも觀察と實驗といふ行が必要なことであります。然るにそれをせずに、只徒に古今の學者の書物を讀んで、誰がかう言つた、アリストテレースがどうだ、ヘーゲルがどうだ、ディルタイがどうだ、それの行的苦心といふことに氣付かず、其の言說の末のみを捉へて、やれ矛盾だ反對だというて居るのは全く机上の空論である、論理學としても「學」ではないのであります。若しそれ等の人の云ふ矛盾や反對を除けたならば、どんぐりの長けくらべ、何にも殘らぬことになるのであります。近頃雜誌新聞等を見ますと、そんな議論のみ、詭辯のみ、人をも迷はせるだけであります。學問は進んで國家は滅亡します。論理學者、哲學者も自然科學者が觀察實驗をして居ると同じやうに、我々の心身乃至思考、或は精神の働きを觀察實驗して行くのが仕事であります。そして諸科學に基礎を與へるなどといふ越權の沙汰は自讓すべきであります。つまり、行的に考へます時には、第二の「何故に」に答へらるる權威なるものが根本の基本要求であります。だから、前にも說明しました通りに其處に權威が實存するならば、それを拔いてしまつて問題とせずに、直ちにHow?の方法（方法論）にあらず）が出て參るのであります。隨つて又What?に對する各種の問題も亦問題にはならないのであります。

そこで先刻殘して置きました處の、例へば「神」といふ概念について考へて見ます。日本人は子供の時から神樣にお辭儀するやうに訓練されて居ります。それで日本人ならば神の前には自ら頭を下げます。そしてなぜ頭を下げるかと問ふ必要もなく、隨つて又神とは何ぞやと問ふ必要もないのであります。然るに例へばキリスト教の根源になつて居る神の概念をばギリシャ的の知識をもつて定義した時に、神は彼岸へ行つてしまつて、全智全能といふやうなことに抽象されてしまひます。理論の前には神を斯く概念化した方が如何にも都合がよい、平凡人は其の理論でごまかされてしまふのであります。佛教に於きましても、毘盧舍那佛は法化され、阿彌陀佛は慈悲といふ概念化されて無量壽無量光といふ最も抽象的の性格が與へられて居ります。つまり知的に考へるからさういふ抽象になるのであります。概念でもこれが具體化され、卽事而眞、當相是道となればそれでよいが、然らざる限り抽象であります。さういふ風に抽象されると、人と神との間に無限の間隔が出來る、隨つて人と神との合一といふことは絕對不可能となるのであります。ところが日本のやうに、天御中主神から始まつて天之常立神、國之常立神、天照大神、神武天皇と漸次に具體的となり現人神としての天皇とは、敎育勅語に宣はされる通りに、其の德を一にすることは容易なのであります。卽

ち斯く絶對の權威を現實に、單なる理論でなしに有つて居る日本人ほど此の人と神との根本的の和合、從つて又人と、自然と、人と人との和合をなし得るものはないのであります。故に日本精神として根本的に存在するものは、先刻說明しました通りにただ隨順歸依奉仕の精神が其の根本となる所以であります。それで先づ隨順して行するといふことが行の國日本の立場となるのであります。先程御話しました通りに、生徒が先生の權威に隨順し、直ちにどうしたら宜しうございますかと先生に歸依してやつて行くならば、總てが成程々々と體得せられるところに知は自ら生ずるのであります。さすれば又愈々歸依する心が出る、その歸依卽ち「信仰」であります。隨つて信仰の上から出て來るもの、我れを捨てたる奉仕の念があるのみであります。これが日本精神を極く簡約的に說明したわけであります。ここに日本人にははじめから我が捨てらるるのであります。然るに近代の教育は個人主義の「我」を立てる方が無反省に取り入れられて來た、そこに根本的の間違ひが起つて來た所以があります。

それは先づそれだけにして措きまして、この隨順といふことを考へます時に、近世科學の父と呼ばるる所のベーコンの『新論理學』のアフォリズムの第三に「學問とは力なり」といふ有名な句があります。あれは單に今日の、卽ち今言うたやうな自然科學と限つた意味ではなく、更にあの時代の精神を考へて見なければなりませぬ。それは日本で言ひます學問であります。人間の力と學問とが一致するといふことは如何なる意義にてなりやは更に考へ直すべきであります。その次の句に

「自然は服從することに依つて征服し得られる」これは本文が羅甸語で此の日本語譯の順序通りでありますが、英譯にしますると征服が先になります。ここに日本と英國との根本差違がありますが、先づ第一に科學者の態度は服從卽ち隨順が大事なのであります。隨順なくして觀察實驗の行が出來るものではありませぬ。既に申上げた通り、科學者が實際に觀察實驗して居るところのものは隨順から出て來るのであります。思想問題に就いても、自然科學を實際直接にやつて居る者が餘りそれにかからないといふのはさういふところから來て居るのであります。しかしその結果を抽象的に考へますから、自然科學からそれに入つた者はなかなか轉向も難かしいといふやうな若干の例もありますけれども、自然科學をやつて居る者、觀察實驗して居る者は、自分が出來なければ、先生どうしたら宜しうございますと先づ先生に隨順しなければならぬのであります。英國精神と日本精神と違ひますのは、この「征服する」といふ言葉が英語の文法では先に來る、卽ち目的で、隨順は手段となります。日本のはただ「自然に隨順する」そして其後の事は「つとめ」である、自然を征服するのが目的ではないのであります。これも西洋ばかり考へて居られる人々は、日本に科學がなかつたではないかと言はれます。併し科學の意義をよく考へて戴きたいのであります。吾々自然と交涉なくして日本人だけ幽靈として生活して居たのではありませぬ。古くは傳敎や弘法やが山川を開き橋梁を架け大寺院を建てて居る、其他名僧知識が地を相することに巧であつたことは驚嘆に値ひする。武將の築城や其他自然に關する知識なくして出來たのではありませぬ。卽ち日本人たる方法に

於いてやつて居つたのであります。それに何の科學なしと言ふのであるか、科學が無いのではなく、科學の形式が違つて居るだけであります。特に近世の西洋になりますと自然界の「征服」といふことが主になつて來まして、其の方法として便利なのは機械化することであります。總てを機械化する働きとして、内には抽象的概念を、外には分類するといふこと、そしてそれの基礎となるのは數學といふ樣に自然科學は特にその歩を進めて來たのであります。日本はどこまでも隨順するといふ形に於いて、卽ち自然と和合するといふことから出發して行くのであります。そこで從來の科學をどうしたらいいかといふ問題にしますれば、西洋流では行き詰ります。日本人的の氣持であれば科學の本來の精神を失はずして無限の發展が出來るのであります。かういふことが直ぐに後で申上げようと思つた結論でありますけれども、ここでも申上げることが出來ます。

それで、兎に角日本氣質にすると最後の仕上げが奉仕といふ心持で行くべきものを、西洋流では、我の力で對象を征服するといふのが科學の眼目であります。さういふところに目標をとつて來ると自然科學はつまり物質科學になつてしまふ。日本人ならば研究すればする程、之を人とするならば陛下の赤子、物とするならば、神物として考へるのに、西洋流にすれば、人をも機械化し、一切のものを皆な死物として取扱ふ、卽ち唯物であります。其の結論も亦利用といふ唯物論的になる、如何にも物質科學といふことになるのであります。ちよつと笑ひ話でありますけれども、近頃この征服といふ言葉が中々はやりまして、山登りをする者が處女峰の征服等と言ひます。なんときざな語ではありませぬか。そんなことを言ふものだから、神の罰が當るのです。そんな意味で、日本人は山川草木を見て居るのではありませぬ。富士の山をどう見て居るか、征服するつもりで見て居つたり、又は登山するのではありませぬ。神聖なるものとして、共にそこに融合され、神を拜するつもりで、山登りをするのであります。そして其の山登りの方法にも日本的の科學がそこにあるのであります。自然科學の範圍でならば此の誤りは犬したことでありませぬが、此の科學精神が一切に及ぼされた時、非常の間違ひとなるのであります。總ての問題に於いて、個人主義の今日の行詰り、今日歐米諸國が悉く修羅道、餓鬼道に陷つて居る現狀を御覽下されば分るのであります。互に相手を征服しようとするからのことであります。奉仕のつもりで出て來なければそれの打開は出來ないのであります。自然科學者が一生懸命になつて事物を研究するなら、その事物に對してどこまでも奉仕の心持に於いて出て來るのが本當の日本人的科學精神であります。昔ならば其の方法は神託なのであります。然るにそれを征服するつもりでやる、當然機械的に對象を見るといふことになりますと、そこに自然科學は物質科學といふやうなことを言はれても仕方がないやうなことになるのであります。

かう申しますと如何にも獨斷のやうに御聞き下さるかも知れませぬが、ここまで私が言ふについてどういふ考への經路をとつたかを充分に御話しなければ分らぬと思ひますが、それが出來ないのでありますから、今の處私の言說を如何樣に御聞取りになるかは私からはどうすることも出來ませ

ぬ。私の結論から云へばただ日本のみの組織が、神から出でて神へ歸るのであり、總ての態度が隨順の行の上に漸次に解消して行くといふのが行の國日本の立場、卽ち神から出でて神へ歸るといふ形式をとるのであります。それで、同じく歴史といふものを考へるにつけても、西洋のやうに昔と今日との間に民族が違つたり、又從つて宗教が違つて來て居る場合には、それを日本的に考へることが出來ませぬ。故に又西洋の歴史觀をもつて來て、まだ今日多くの學者がそれから脱し得ない如くに、日本の歴史を律しようとすれば、それは恰度日本のお母さんと言へばいいものを、嫂の姑と言ふのと等しいことで、それでは日本の本體が分らぬことになります。日本の本體はどこまでも神より出でて神へ歸る。そして其の内容を又自己の行で（敎と云ふ知的のものでなしに）作らなければならぬ。そこに隨神の道があるのであります。日本人ならば自然科學者と言はず、如何なる人でも、悉く隨神の行をして居る行者であり、またあるべき筈であります。ここに敎育勅語の内にも御呼びかけになつたり、並に帝國憲法に於いて御定めになつた所の「帝國臣民」といふ意味が出て參ります。そしてそれは皇運扶翼の行者であるべしといふことであります。だから明治天皇が御聖歌に仰せられて居る如くに我等臣民は「みちみちにつとめいそしむ國民」であります。そこには理窟なしに天皇といふ權威に隨順する、而て愈々其の權威を明らかにして行く、それが日本人であります。卽ち神より出でて神へ歸るのであります。

序でに申上げることがあります。一體人民といふ言葉は、近世の個人主義が發達し、更に近時にデモクラチックの思想が出て來た時に、英國に於いて言ふと、我れはサブヂェクトに非ず、君主に對するサブヂェクトとなることは嫌やだ、我々はシティズン（市民）だとかう言つたのであります。フランス語で言へばスウゼイに非ずしてシトアイヨンである、ドイツ語で言へば我れはウンテルターンに非ずして、ヴェルトヴュルガーだといふ樣な考へ方、卽ち專政的の君主に反抗の意味にて世界人といふ考へ方であります。その考へ方が日本に入りまして公民敎育といふものが始まつて來ました。これは以ての外の事であります。日本に於いてはただ大業翼賛者としての臣民あるのみとかう考へて貰はなければなりませぬ。公民は大御寶といふ意義にして頂かねばなりませぬ。それは今の公民敎育とは内容も形式も自ら相違すべきであると信ずる次第であります。

總て個人主義の「我」を主とする所のものは、結局我より出でて我へ歸るといふ形式であります。それがために知的の組織が出來る、神といふも其他何と言ふとも皆な知的に考へられたるものに外ならないのであります。神より出でて神に歸るには、日本といふ國家が組織建設せられるので、理窟は皆拔かれてしまひます。之に反して「我」を主とするところから一切に對して理窟が必要になつて來て、理窟々々で遂に種々の學問が又各特異の立場で組織され、更に其の終局統一といふ樣なことで哲學といふ樣な、云はば餘計なものが出て來るのであります。そして知的組織といふことから、今日のドイツ哲學者などが要求するところの客觀的妥當性といふことが必要となるのであります。しかし如何に客觀的妥當性といふことを論證せんとしたところが、觀察と實驗とに訴へ得らる

るもの、卽ち機械化の出來る範圍ならば、本來が抽象的であるからそれでよろしいが、然しそれ自體が一面的のものであるが故に、結局自分に都合の好い論證であります。云はば自分の勝手な議論であります。それが如何なる立場の「我」であるにせよ、「我」のある限りそれは主觀を脱しない、ともすれば强辯に陷るのであります。一切理窟を言つて居れば和合が破れてしまひます。先刻來も申します通りに、科學者が、俺の研究して居るところは斯うだと互の主張をまげなかつたならば、同一の科學の間にでも何等の統一がなく、實際の役には立たぬこととなります。そして我から出でて我に歸るといふ組織の内にて、明確に區別の出來るのは、一般に云ふ東洋の方法と、ギリシャから出て來るヨーロッパの方法とであります。この間に少し許りの錯綜はありますが、大略は明確に區別が付きます。

ちよつと玆でもう一つ申上げて置かねばならぬことは、原始民族が如何なる生活をして居つたかといふことを考へて見ますと、それぞれの置かれた境遇に依つて違ひがあります。印度の古いところのものと、ギリシャと違ひますが、さういふ相違を捨てて考へた時に根本にはよく似て居ります。ところがその知識の發達といふ點からして非常な分れ方をして居るのであります。共通的な原始狀態がどうあつたかといふことを詳しく御話して居る暇がありませぬが、これも亦序に附加して申して置きたい。――この間或る方もさう言つて居られたのでありますが、藤原博士がかういふことを言つて居られました。日本はこの狹い所であるけれどもまだ人口は飽和狀態には達して居ない。それは色々の方面から言へるが、其の原因は濕氣が日本には豐富であり、從つて食物が十分にあるといふことに歸着するのであると。所でギリシャといふ國は雨の降らない所であるが爲に、人口が直ちに飽和狀態に達する、それで海外へ發展した所にギリシャ文化が出來たのであります。此の原始狀態から個人の自覺への移り變りはプラトーンの『理想國』によく顯はれて居ります。それによると日本の古い形とよく似た多くの點を見出すことが出來ますが、既にギリシャ文化としてそれが發達した頃には、最早個人主義となつて居ります。さうするとその時既に階級が出來て居りました。卽ち所謂生產者階級と消費者階級との對立であります。而してそこに「我」を本とした理窟が出て來たのであります。それがソフィスト（詭辯論者）であります。ソフィストとは御承知の通り本來の意義は知識の所有者卽ち知者であります。何の爲の知、何の爲の理窟であるかといふと、所謂シティズン（市民）自衞の爲のものであります。消費者階級、肉食者流が如何に生產者階級を取扱うて行くかが中心問題であつたのであります。その型は、例へばソークラテースの自覺に就いて見ても、アポローの神言としての「汝自らを知れ」であつて、卽ち一切を汝に訴へるといふのが、これがギリシャ以來今日までその思想を受けて居る所のもの、卽ち知識を主とする一般の究極の型であります。神より又自然より解放せられて、只人と人との個人的對立に於いて汝に訴へる、それが惡く云へば、自分をお留守にして他をせめるといふことになります。キリスト敎が其の力を失ひ、ルネッサンス時期を經て近世の學問組織がそれぞれ力を得るやうになつて來た時に、宗敎と民族との

混淆といふところから、個人々々を主とするやうになつて來ました。その個人主義と聯關致しまして自然科學が發達する、そしてそれは前申上げた通り方法論を以て其の主としたことの歸結であります。現に西洋のは「我」と「汝」の契約關係、卽ち横の關係であります。此の契約關係として總てを見るより外に途はありませぬ。この點から言へば、お前が斯うしさへすれば俺は斯うするといふ調子で自分をお留守に致してしまひ、其の爲に餘計に理窟が出て來るのでありますが、それが更に個人の自覺といふ上から人と神との對立が、人と自然との對立とせられ、汝に訴へたところをば、今度は自然に訴へます。ですからこの自然に對してはそれを只管分析する、卽ち一切の成立をその條件へと訴へるのであります。この影響を受けた今日の日本人が自然科學尊重といふ所から、自他共に此の方面に少し過ぎて居りはしないでありませうか。諸君自ら御困りになつて居りはしませぬか、自分の子供や、又教子等に事を命じても中々實行しない、そして直きに抗議を申込む、そんなことは向うがしないのに自分だけやるのは損だと言ひます。つまり個人主義的に育て上げられるときは隨順を知りませぬ。好條件をのみ望み、好條件なれば實行するといふのであります。それから各種の社會主義が出て參るのであります。現在の狀態を見てそれを說明する爲に條件に分析する、そして條件をさへよくすれば社會はよくなるといふのであつて、其の極は遂に共產主義的のロシアのやうになるのは當然であると考へられます。故に其の思想を蘇らすのには日本の本質へ歸らすより外何も途がありません。斯かる理窟でもつて日本へ歸らせる方法がないといふことを私は斷言を致します。條件の條件の又其の條件を分析する、そして自然科學の條件は遂に機械的のものに過ぎぬ、活きた有機的の關係ではないのであります。

ところが東洋はそれと正反對であります。先づ印度に就いて見ます。ウパニシャッドの哲學がどういふ性質のものであるかといふことは說明を略しますが、兎に角釋迦が出て來まして天上天下唯我獨尊と言ひました。卽ち東洋の特色は汝へ訴へるのではなくして、それを我へ訴へるといふことがその特色であります。三界唯一心心外無別法で、鬼を出さうと佛を出さうと皆悉く己れの心の使ひ方によるとします。それで科學的に漸次定められて來た因果概念とは非常に違つた發達をして來ました。佛敎には因緣といふことが非常に重要な問題をなして來るのでありますが、それには自然科學の立場からは一切を分析するのでありますから、機械的にのみ必然が云へる、他は偶然と云ふことに過ぎないといふことになります。然るに東洋的立場から行くと、その因緣の和合するところに必然が出て來る、そこに科學的に嫌はるる運命といふことが大切となるのであります。これも認識論上の問題でありますから今は深入りは致しませぬが、兎に角東洋では、殊に日本では日本人として生れ、みちみちにつとめいそしむ、又さうなくてはならぬといふ所に現に大なる因緣を我等はもつて居るのであります。この親を親とし、子を子としなくてはならぬところに、それは因緣の然らしむるとなさざるを得ない、そして親が親たり、子が子たる働きをもつのであります。個人主義的立場では平等であり、自由である、自由の主張が中心を爲すのでありますから所謂因緣などといふ

ことは一種の宿命論だと云うて否定せられて來たのであります。そこに日本精神と個人主義的なものとの相違があります。とにかく釋迦は結局「我」に訴へて來たのであります。

それから儒教は周の文王・武王・成王等のやつた仕事、そして其等を輔けた周公のやつた國家的組織を本にして、更に原始狀態を考へに入れて、亂れた世を組織せんとして起つた孔子の考への組織を完成したものであります。そして其を要約したのが彼の『大學』であつて修身治國平天下を說いて居ります。此も結局修身を本にする限り、我に訴へる方法であります。しかしこの修身といふことに就いて考へますに、治國の原理あつて修身は可能でありますが、單に修身から治國平天下は出來ぬと我が慈雲尊者が喝破した如くによく注意すべきことであります。今日までよく修身々々と言はれて來ました。そして小學校から中學校、高等學校と修身といふ學科目が重要視せられて來ましたが、それがどれだけ今日の日本人に役に立つて居るかを考へて下されたならば、皮肉の感が致すのであります。卽ち其處に日本の從來の教育の目標に誤りがあつたわけであります。修身科は先づ修身に關する知識の整理位、又それも個人主義的のものであつて、日本といふ率直の立場のものではなかつたのであります。君に忠とは云々親に孝とは云々といくら定義をした所が支那流或は封建時代の報恩主義的のものであつて、それでは今日の青年を指導する力がないのであります。ただ一つの權威を立て、若しくは立て得ずして、理窟で抽象的の概念を敎へたところでそれは實行には何の役にも立たないのであります。だから、又今日佛敎がいくら氣張りましても、結局何の爲に死ぬのか、極樂往生したいといふだけのこととなり、個人として悟りたいといふだけであります。理窟は結局我から出る、儒敎の場合にしてもさうであります。道を實行する人は竹林に入り、或は川に自ら投ずるか、山寺の同志だけの修道院に籠るかであり、治國平天下は思ひもよらぬのであります。それを日本が夙に佛敎、儒敎の善い所だけをそのまま取入れたといふことは、權威による隨順性をもつて居るからであります。そしてそれは本來の働きに從つて居るからであります。ただ獨り日本に於いてのみ、其の行に於いて「我」が解消されて行くのであります。それにはよく云はれる如く短所も伴うて居るに相違ないが、其の短所は短所として自ら又轉回せしむる力のあるのも亦日本であります。

それで、先刻御話しましたやうに、ギリシャより續いた精神から行くと、結局人と人との契約的關係といふことになり、神と人との問題も亦其を基とした契約關係であります。それが近世の個人主義といふ、個人の存在に目醒めたものを本として來たものでありますから、結局功利主義、卽ち個人の利害といふより外に、何事も考へる途がないのであります。それで如何なる場合に於いても、それは自覺された問題でなければならぬのであります。自覺といふことが常に叫ばれるのは、畢竟個人主義の影響に外ならぬのであります。公民科を受持つて居られる方は御分りになるだらうと思ひますが、學校生活でも其他何んでも自覺が中心になつて居ることを、然も自覺を中心としたときには利害より外に說明の途のないことを。ところがその自覺の自を失ひ、覺だけが殘りますのが東

洋的特に禪宗のやり方であります。然るに日本に於いてはこの覺も失つてしまひます。これは一寸奇嬌な言說のやうでありますが、十分に自己意識を有つて居ながら、中心を奉じ、中心の動きに隨順して行くのでありますから所謂自覺はなくなる、これをそれ故に私は神國日本の特に有つて居るところの「高次の自己意識」と申して居るのであります。大乘佛敎的に言へば、住於無所得といふことに過ぎませぬ。然しそれは說敎ではない、主義ではない、演壇よりの說敎ではない、實際の行であります。日本人が日本へ隨順しての行であります。それによりて自らも他人も自ら動くのであります。それは其故に人と人と、又人と自然との調和であり、同時に又崇神天皇が「人神司牧」と言はれた如くに、世界に類例のない人と神との全體的一圓融和であり、それが日本の國體であります。

それで此の事を今日特に自然科學として御考へを願ひたいのであります。眞に科學者としての値打のある人ならば、それは日本人に限らずに、其の人と自然との間に調和が如何に出來て居るかといふことであります。この調和といふことを眼目として考へた時に、日本の自然科學が日本精神によつて最早今日になりましては西洋各國のどれとも遜色のないところまで進んで行きました。然しそれは意識的にかうしよう、ああしようといふ立場に於いて出來たのであるか、知らず識らずの間に出たのであるかといふことを御注意願ひ度いのであります。今日でも學者の內にはまだ及ばぬまたまだといふ人が澤山ありますが、科學者はそれでよろしいが、批評眼ではないのであります。勿論斯くなる所、世界先進の各國が各それぞれの特色を有つて居ります。ドイツ人の科學にはドイツの特色があります。イギリス人のにはイギリスの特色があります。彼等の通りに日本のがなるといふことが進步だと思つたら、それは自己を失ふことであり、大間違ひであります。彼等の有たないものにして我のものたる所のものを發展せしめ、歐米の何處へ持つて行つても遜色のないものとする、又なし得る所のものを作り出す、そしてそれは決して日本では自己意識的に出るのではありませぬ。換言すれば所謂方法論的の研究から出るのではないのであります。これも一例でありますが、私の敎へました者が大學を出まして或る方面の科學的研究をやつて居ります。これはもう數年前でありましたが、其の如法の學徒は言ひました。先生最早我々は英國流の方法ではありませぬ。また所謂ドイツ流の方法をやつて居るのではありませぬと。それなら何をやつて居るのかと尋ねますると、ただその「物」にぶつかつて居るんだといふのであります。それで私はそれが日本精神的方法だというたのであります。ただ我の力でかうやらうといふ所謂方法論的計畫的ではありませぬ。神國日本では、國が神國であり、君は神皇であり、總ての物は伊弉諾伊弉冊兩尊の產み給ひしところのもの、卽ち神物であります。同胞兄弟、其他與へられたるところのもの皆な悉く神物であります。神物といふ言葉は近頃の若い人には非常に嫌やでありませうが、實際の心持としては、日本人ならば神物として考へて居る、卽ち前述の如くに神の示顯として方法を立てるので我と彼との間の調和がとれる、そこに兩者共に活きるといふ特異の方法が立つのであります。意識的計畫的の方法が先に

立つのではない、そのままにぶつかつて行く、そこには結果の如何なんかを考へては居ない、何にならうが、どうならうが構はない、兎に角やるんだ、何かの結果が出て來ると信じて立つのであります。斯う言ふ立場は却つて若い者の間に出て居ります。相當に年をとつた、西洋かぶれの人には、打算的な英國方法論、計畫的な獨逸方法論に執はれて居る、そして自分には何も出來ないのであります。將來諸君が青年の御指導下さるのには、此の若い日本人のもつ氣持を餘程尊重して戴きたい、英國流や獨逸流で此の氣持を縮めない樣に御願ひ致したいものであります。

これを更に實際機械を運轉して居る者の氣持、更に機械そのものを考へるに就いても日本のものをよく考へなくてはなりませぬ。上述のベーコンの『新論理學』のアフォリズム第二の方法論を最も簡單に說明して、「色々の道具は我々の働きを進步せしめ且つ統制する」というて居ります。日本の職人の有つ氣分、卽ち彼等がなぜ道具を尊重するか、それはベーコンの言ふ如くに、道具は我を助けると同時に我を進步せしめ統制するからであります。いはば道具が自分なのであります。職業人、藝人であれば、少し極端な言ひ分ではありますが、所謂江戸ッ子氣質で、明日の糧を考へてはならない、宵越しの金は持たない、その意氣で眞にそのもの或はことにぶつかつて行くのであります。此の氣魄の現れが今日に於いての現狀、大工業と言はず小工業と言はず、日本のものが世界に進出した所以であります。今若し大工業に於ける日本人の氣持ちの一標本を御覽になりたければ、石川島の造船所へ行つて、其處に働いて居る職工がどういふ風にやつて居るかを實地に見て戴きたいのであります。西洋流の「我」を主とします時には、我が機械を使役するか、機械が我を使役するか、何れかよりの外に考へ方がないのであります。其れ故に結局大工業は資本主義だ、我等を使役するものだ、故に資本主義は否定すべきものだといふ如き議論も出て來るのであります。ところが日本人の働いて居る氣持ちはその何れでもなく、機械は我と融合調和するといふ第三の立場がとられるのであります。これは日本人の持つ一つの特殊な力で其の爲に生產が非常に容易に且つ新味を出すのであります。何も日本品が特に安いといふのではありませぬ。彼等が食ひ合ひ、取合ひの修羅道を演じて居るところから、生產に費用がかかる、生產物が粗惡となる、其の間にいはば日本精神がずつと浸み込んで行つたに過ぎないのであります。この點に就きましても、又よく考へない人は、滿洲事變を契機として大いに日本は發展して來たと言ふのでありますが、考へのない事であります。滿洲事變は日本精神の一つの大きな現れであつただけの話であります。產業の進出も現に若干年前からの事で、そんなことが一朝一夕に出來ることではありませぬ。又近頃この契機といふ語を餘りにも勝手に使はれて居るのでありますが、契機といふ意味はそんなまやさしいものではありませぬ、承前起後の力とならねばならぬ、正當に云へば滿洲事變を機會として云々と云ふべきであります。實際を云ふと、日本は從來種々の試錬に出逢ひました。表面はともかく、內面には日本人的の力卽ち和合しなければならぬやうになつたので、其處に高次の自己意識的なもの、卽ち日本的なものが出て來ました。滿洲事變もその一つの現れに過ぎないのであります。

もう一つ説明して置いた方がいいと思ひます。この事は實際勞働をして居る人々の前に私が常に訴へる所のことでありますが、すると彼等はその通りだと首肯して吳れるのであります。それはかういふことであります。今私を一個の勞働者であつて失業したとします。そして方々賴んで歩いて漸くどこかの大きな工場に雇はれたとします。榮つ葉服を着、猛烈に運轉して居る機械の中に立つて油臭い生活をして、それで日給一圓だとするならば、個人的に考へられた私ならば實際に嫌やになります。個人主義、平等自由と云ふことを建前とし、權利義務の上からのみ考へたならば、嫌やになるに種々の理窟が出て來るでせう。そして嫌ならば只止めるより外にないのであります。ところが日本人としてはそこに隨順しなければならないものがあります。先づ第一が人と人との和合であります。即ち家には親が居り、子が居り、妻が居る、今俺が嫌やだから職を止めたら仕方がない、だから先づ親の爲に子の爲に、妻の爲に、仕方なしに、我といふもの、乃至其を本とする種々の理論を沒却する、されば家内の人と人との和合が先づ第一に出來るのであります。茲に喜びが起り、それによつて機械を運轉する、そしてそれに若干日間馴れて來ますと、次にその機械と自分とが調和して參ります。それで機械を大事にする。機械を大事にする樣になれば監督者と、同時に他の同職との調和が又出來て來るのであります。さうすると例へば、自分は頭が痛い、今日は一日休みたいと思つても、機械は休まうことは出來ない、俺一人休めば外の人（其の時は現に單なる他人といふ抽象的のものではない）にも迷惑を及ぼすといふやうになつて、少々の病氣でも休めないといふことになるのであります。そこには勿論利益といふものが根柢にあります。日本人だとて食はなければならぬが、もうさうなれば利益を忘れていつの間にか高次の自己意識に依つて支配されて行動するのが日本人であります。その高次の自己意識に支配されて居る時に、それが又神とも融合して居ると自分も亦自己發展の途を見出して來る、それが上述の運命の開展であり、自ら神の前に有難うといふ感謝の念となり其の前に跪くのであります。これは日本人のみの有ち得る氣持であります。日本人だとて利益を離れることは出來ぬ、又理論を離れることも出來ぬ、然しそれの落着くところが此の氣持であります。結局如何なる處に落着くかが其の國民性であります。

それで、私は又このことは數年前に考へたことで、其後色々觀察して居ることでありますが、我を主とする個人主義の生活形式は結局「取りやり」であります。英語がさうであります。やるのもとることとの手段方便としてのものであります。然るに日本のは逆でありまして國語が示して居りますやうに「やり取り」であります。賣買の上に於いても、日本のは「賣買」であります、個人主義のは「買賣」であります。總てこれだけ顚倒致します。先刻申上げましたやうに、行の立場で行くのと智の立場で行くのとは、總てかく顚倒して居ります。自分が賣つて自分の必要品を買つて來るのでありますから、賣る爲には生產しなければなりませぬ。だから日本の神話は根柢的に產靈（むすびのみたま）をもつてはじめとし、伊弉諾伊弉冊兩尊は山川草木國土一切を產み給ふといふことになつて居るので

あります。又生産するには取らうとして出來るのではありませぬ。さうすれば農業にすれば土地はやせる許りで結局とれなくなります。自然にはどこまでも服從隨順しなくてはならぬ。そして自然と一つになることに由つて絶えず生産が出來て行くのであります。イギリスのやうに取る爲に買つて來る、買つて來て更に利益を得て賣る、そして英國は其の富をとつて來ました。さういふ風であるから、近頃は民族や國家の自給自足といふ樣なことで、容易に取ることが出來なくなつたから困つて居るのであります。斯くて西洋のは修羅道になるのは自明であります。然るに日本のはやるのである、我を立てないのである、故に永劫無限に發達するのであります。此の間も或る會で勞作教育について、某學者が意見を發表せられたが、もと獨逸學者の模倣であるものですから、獨逸學者の說を引用せられたり、又日本の某知名の哲學者の所見を引用せられたりしました。所が結局その學者は自分で働いたことのない人であつて、勞作といふ抽象的概念の論理的の分析に過ぎないものでありました。それで日本の教育が律せられては大變なことであります。日本人が勞作する時には取らうとするのではあるけれども、其の間に自ら其の事を樂しむといふ、文字通りの意義にての道樂といふ意識が働く、それを抜きにしては日本人の勞働ではないのであります。從つて又生産した生産物とも同一になる、これが日本人の勞作教育の主眼でなくてはならないのであります。如何に學者なるものが、日本を忘れて西洋的な頭で考へて居られるかのよい標本を其の學者の上に見得たのであります。同樣に科學者が觀察實驗の行をせられて、そこへ出て來るものと自分とが合一する、

それが前にも申しました如くに、利害を超越しての滿足があり、其の滿足によりて又次なる研究へと、絶えざる行としてそれが續けられる、之を念相續といひ、念々不捨者、卽ち正定の業と云ふのであります。此の意義をば心理的にいくら分析して居つたとて出るものではなく、日本的の生産といふ氣持は結局西洋の心理學では出るものではないのであります。

かういふ意味に於きまして、初めにも申上げましたやうに、日本精神といふことが强く主張せらるる樣になつたからとて、それは決して自然科學を否定するのではありませぬ。否ないよいよ自然科學的の方法でもつて、日本精神を養つて戴きたいのであります。そしてそこには又獨自の日本的の科學研究といふものがあるべき筈であります。獨自と申しましたところで、それは何も特別のものではありませぬ。只西洋流の方法論倒れでないといふことであります。この間も又或る會で問題となりました事でありますが、日本の論理は西洋の形式論理のみではなく、更にそれ以上の以心傳心の論理があるべきであります。然るに其の以心傳心の論理學はないではないかと反問せられた方がありましたが、何といふ日本を知らない人であるかと云はねばなりませぬ。今までの日本の歷史や、其他總ての日本的の藝術や、修養の方法は皆な以心傳心の論理を現はして居るのであります。西洋流の型に當嵌めた、つまり機械化したところの論理ばかりが頭へ入つて居ると、他の大なる範圍の働き方が見えないのであります。日本的の和合、それは昔ながらの神との調和であり、自然との調和であり、人との調和であり、そこに絶えず不斷の努力として一筋道が通るといふのは、念相

續といふことであり、それは以心傳心の論理、縱の統一であります。之を一般的に言へば、帝國臣民としての「つとめ」の論理、具體的には皇運翼賛の爲の、みちみちにつとめいそしむべきものであると、斯樣に考へたならばそこに日本的の方法が出て來る筈であります。それをドイッ流の方法でなくてはならぬ、イギリス流の方法でなくてはならぬといふやうに、機械化することだけが、唯一の科學的のものであるかの如くに考へる考へ方は御免を蒙りたいのであります。さうなると自然科學と我々が本來持つて居る所の精神とは反對し、或は矛盾するのであります。

先刻申しましたやうに、學校教育にしても、一生懸命になつて觀察實驗して居る間はいいが、一歩それ以外へ出ますと、遂に理論にかぶれて、そんな氣持を捨ててしまふといふことになり易いのであります。その用意さへあれば日本精神といふことを高調するが爲に、愈々もつて科學的精神をば進めて行かなければなりませぬ。科學的研究といふ態度を實際の事に就いて考へて行くといふ態度の養成こそ其の目標でなくてはなりませぬ。つまり先刻も申しました日本人の有つ道樂といふ精神であります。同時にそこでは教育者と被教育者との間が又分離するのではありませぬ。理論的に云へば教育者と被教育者とは對立の立場にあるのでありますが、觀察と實驗の行に於いては、それに失敗しても成功してもう先生も先生といふ自分を忘れてしまつて、只實驗の對象に自他共に精神を打込んでしまふのであります。卽ちそこでは、教育勅語の末尾の御句に示されてある教育の精神が實際行はれつつあるのであります。先般九州大學に實に不祥な問題が起りました。それは人間の腹をたち割つて置いて、醫者がお互に喧嘩したといふことであります。あれがドイッ流の最も惡い弊害を眞似したものと云ふべきであります。醫者は患者を相手にすればいいのであります。ところが患者の「者」をとつてしまつた「患」だけを對象にするのがドイッ流の學問であります。そこで「病氣」さへ治して居ればいいといふことになつてしまふのであります。さうすると如何にも「俺が」前面に出て來ます。東洋流の醫は仁術なりといふのは「仁者人也」でありまして、患者と醫者が共に一つになつて來るといふところであり、それでこそ、本當の治療術としての醫學は發達するのであります。患者はさう云ふ先生にかかつて居れば假令死んでも喜びとなるやうにならなくてはなりませぬ。斯くて患者も醫者も共に己が方面方向に伸びて行くのであります。患者の「者」をとつてしまつて「患」だけを相手にして居るのが、ドイッ流の科學的といふことの誤りであります。總て取扱ふものも、先刻も申しましたやうに物理學の對象たる「物」それも神物である、假令元素と雖も又神の物だ、神の物として元素も亦自ら其の構造を持つて居るのであります。日本の國體を寧ろその儘其の構造として居ると云はねばなりませぬ。勿論元素の研究と國體の研究とを同一にすることは出來ませぬが、元素の構造といふことを考へるについても、其處には日本流の「自分と共に」といふ心持がなくてはならぬ、其處に自然科學も無限の發達をするのであります。否、自然科學のみならず、總ての方面に於いて、日本人の力は無限に發達し得るといふ展望を有ち得るのであります。

敢て私のことを申上げまして、御參考にはならなかつたかも知れませぬが、以上で大略申上げたいと思つたことは申上げたつもりであります。

日本精神と自然科學　終

昭和十二年十二月廿七日印刷
昭和十二年十二月廿一日發行
（毎月一回二册發行）
日本文化　第十二册

編輯兼發行者　日本文化協會出版部
右代表者　金山賢照
東京市豐島區西巢鴨二ノ二七一二
印刷者　山下謙之助
東京市麴町區日比谷公園市政會館
發行所　日本文化協會出版部
電話　銀座一一七四番
振替　東京七三九八七番

不許複製

終